

巻 頭 言



東大の挑戦：秋入学と教育の国際化

東京大学理事・副学長

清 水 孝 雄

Takao SHIMIZU

少子高齢化の社会を迎える日本、世界で活躍出来る学生の育成が大学の課題となっています。高校生レベルでは優秀とおもわれる日本の学生ですが、大学を卒業する時点では、欧米のレベルとは随分差がついているといます。潜在的には優秀である学生を大学は十分に育てていないのではないのでしょうか。学生のアンケート、タイムズ誌などのランキング、また、熱意ある教員の危機感、こうしたものが合わさって、「秋入学と総合的教育改革」の提案が出されました。社会的な反響は予想を超えて大きく、国際標準に合わせることで、我が国の大学のガラパゴス化を変えるべきという賛同する意見から、入学前後の生ずるギャップを心配する声、優秀な学生の海外流出への不安等、様々な議論が起きています（提案の内容やコメントは東大のホームページに掲載されておりますので、ご覧頂きたく存じます。<http://www.u-tokyo.ac.jp/president/>）。本稿では、医学部として、秋入学提案はどのような意味を持ち、課題を持つかを考えてみたいと思います。

2月～3月入試時期は現行のままを維持しますので、医学生は4月から8月末までいわゆるギャップ（日本版ギャップターム）が生じます。将来小中高が秋にシフトすれば、この期間は単なる夏休みになります。この間は大学が連合して様々なメニューを提供し、学生に複数のパターンを選んでもらうよう考えています。高校時代の復習（現代生物学など）、語学学習、海外体験、また、僻地や被災地でのボランティア活動も重要です。学生に課題図書を与えたり、体力増進に励んでもらうのも良いかと思います。また、病院や介護施設の見学も良いでしょうし、医療がチームで行われているということを医学生は自覚する必要があります。受験勉強の疲れと受動的姿勢からリセットされた学生は9月から勉強モードに入るとするのは海外の諸大学の経験からも明らかです。卒後ですが、春秋二回の国試を復活するのがベストかと思います。国試も問題数を200程度に（プール制）減らし、その分、学生時代にしっかりと少人数教育や参加型臨床実習を行い、CBTなどで評価すれば、初期研修の見直しも視野に入ります。また、2023年問題に備えるのが、国際基準の医師作りになると信じております。「秋入学」は単なる入学時期の変更ではありません。それは、総合的な教育改革や社会システム改革（医師養成制度のプラン作り）の提案です。東大では移行は5年を目処という方針です。是非、この機会に医学界全体でご検討賜ります様御願い致します。

略 歴

清水 孝雄（しみず たかお） SHIMIZU, Takao

1973年 東京大学医学部医学科卒
1973年 東京大学医学部附属病院内科研修医
1975年 京都大学医化学研究生
1979年 同助手
1982年 カロリンスカ研究所客員研究員
1984年 東京大学医学部助教授
1991年 東京大学医学部教授
2003年 医学部附属疾患生命工学センター長兼任
2007年 医学系研究科長・医学部長兼任
2011年 東京大学理事・副学長（学術企画、病院担当）

専 門 脂質生化学、炎症、リン脂質代謝

受賞歴 2004年 武田医学賞、2008年 日本学士院賞